# 2019年 人間発達学部附属子育で支援センター活動報告

古 賀 隆 宮 内 孝 野 村 嗣 宗 正 鳴 海 批 本 用用 美 藤 子 幸 金

# はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育で支援センターは、人間発達学部の開設とともに、2010年4月から大学の地域貢献と学生の学びを主たる目的として子育で支援活動を行っている。本センターの活動は「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「子育てひろば みなみん」「心理サポート」の5つからなり、「子育で支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」は本センター開設当初から、「子育でひろば みなみん」は2015年3月のトライアルの後2015年5月から、「心理サポート」は2016年9月から毎年継続実施している(春日ら、2018;野村ら、2019など)。

「子育て支援室」は臨床発達心理士の資格を持 つ学部教員1名が、地域の方を対象として子ども や子育てに関する心理相談を受ける活動である。 「チャレンジ運動教室」は体育専門の学部教員1 名と学生ボランティアが、運動の苦手な子どもた ちとその保護者に運動遊びを提供する活動であ る。「あそびの教室」は美術専門の学部教員1名 と学生ボランティアが、地域の子どもとその保護 者に工作を通した親子遊びを提案する活動であ る。「子育てひろば みなみん」は非常勤保育士と 学生ボランティア、そして複数の学部教員が、地 域の未就園の乳幼児と保護者を対象として交流の 場の提供と育児相談を行う活動である。「心理サ ポート」は学部教員1名が障害のある子どもと保 護者を対象としてコミュニケーションや姿勢・動 作への支援を行う活動である。

本報告では、人間発達学部附属子育て支援センターの2019年の活動について報告する。

# 1. 子育て支援室

南九州大学人間発達学部附属子育で支援センター活動の1つである「子育で支援室」における子どもや子育でに関する相談業務について2019年4月から2020年2月までの活動を以下に報告する。

#### (1) 概要

昨年度に引き続き今年度は教員1名(臨床発達 心理士、特別支援教育士)が月曜日から金曜日ま で予約制で相談を実施した。また、相談業務だけ ではなく、必要に応じて個別ニーズに対する指導 も行ってきた。相談に関しても、学校などの組織 からの相談も増加し、依頼を積極的に引き受ける ことや教育現場での観察を含めることにより件数 が3倍になった。口コミを含めて地域からの信頼 も増し、電話相談も増えた。このことは、大学が 地域に貢献する働きとしてとても重要な役割果た しているのではないかと考えられる。

昨年度からは実施している学生と共に個別の ニーズに沿って、ケース研究していく、相談活動 とケース研究を結び付けることも有効な手段とし て機能していると考えられる。

# (2) 2019 新規の相談

#### ①予約申し込み

表1に電話受付と新規来談の月別件数を示した。今年度当初は、受理面接が大半を占めたが、南九州大学が、積極的に相談活動を行っていることが、地域にも伝わった。そのため、年度後半から電話での相談も増える傾向が見られた。また、新規の相談者に発達上の課題が多かったことか

ら、相談→検査の必要な場合のアセスメント→継 続的な個別の指導という流れが自然と作られた。

表1 電話受付と新規来談の月別件数

| 月    | 受理面接予約 | 電話のみ | 新規来訪 |
|------|--------|------|------|
| 4月   | 4      | 0    | 4    |
| 5月   | 5      | 0    | 2    |
| 6月   | 4      | 0    | 1    |
| 7月   | 3      | 0    | 0    |
| 8月   | 2      | 1    | 0    |
| 9月   | 3      | 3    | 3    |
| 10月  | 5      | 1    | 5    |
| 11月  | 5      | 2    | 2    |
| 12 月 | 12     | 5    | 10   |
| 1月   | 3      | 4    | 2    |
| 2月   | 3      | 0    | 2    |
| 計    | 49     | 16   | 31   |
|      |        | 65   | 30   |

### ②子どもの性別

今年度当初は、9:1で男子の相談が増多かったが、年度途中から女子の相談も増えてきた。一般的に発達障害の多くは男子の方が多く、顕在化することを考えると男女比と相談内容の変化に関連がある可能性が高いと言える。一方で女子特有の発達障害の出方もあることからより顕著でない状態にも相談が実施できるようになったとも考えられる。

また、相談の年齢層が上がる傾向もあり、前思春期以降の来談者が多くなる傾向が見られた。中心になる年齢層は年長組から小学生の子どもの相談が主流を占めるようになったのは、子ども教育学科が行う社会貢献としては適切な方向性だと考えられる。

# ③相談内容

表2に相談内容を示した。相談内容も昨年まであった離婚や保護者の精神的不調と言うような内容はなく、子どもの発達に関する内容がほとんどであった。

表2 新規来訪者の相談内容

|          | 男  | 女  | 計   |
|----------|----|----|-----|
| 発達に対する不安 | 21 | 11 | 32  |
| 学校対応     | 4  | 4  | 8   |
| 指導方針     | 13 | 4  | 17  |
| 心理検査関係   | 22 | 11 | 33  |
| 親子関係     | 2  | 5  | 7   |
| 指導内容     | 3  | 3  | 6   |
| 計 重複を含む  | 65 | 38 | 103 |

#### ④新規来訪者の居住地

今年は、ほとんどの来談者が都城であったが、 少数ながら三股町や曽於市からの相談者もあっ た。来年度は、都城近辺の子育てを充実していく 方向性も考えながら進めていくことが重要であ る。また、人員の確保や専門性の問題も大切にし ていく必要性があると思われる。

表3 面接日数と面接回数と個別指導

| 月   | 面接日数 | 面接回数 | 個別指導 |
|-----|------|------|------|
| 4月  | 4    | 4    | 12   |
| 5月  | 7    | 14   | 22   |
| 6月  | 5    | 8    | 24   |
| 7月  | 3    | 0    | 4    |
| 8月  | 2    | 1    | 4    |
| 9月  | 10   | 16   | 20   |
| 10月 | 5    | 1    | 14   |
| 11月 | 9    | 11   | 22   |
| 12月 | 12   | 22   | 24   |
| 1月  | 6    | 12   | 20   |
| 2月  | 5    | 8    | 11   |
| 計   | 68   | 97   | 177  |

#### (3) 2019年の教育相談

表3に示した通り、相談と指導を一体化する方向で活動してきたので、個別指導という項目をあげて、集計を行った。単純比較で面接日数・回数で約2倍となり、個別指導でも1.7倍となり今後も活動を充実していく必要性を感じる。

#### (4) まとめにかえて

教員養成系学部の附属センターとしては、単な

る心理的な相談機関としてではなく、指導、評価までの一連の流れを大切にする相談活動が重要であると考える。また、学生の実践力を高める場としての子育で支援センターの在り方を検討し、ボランティアとしてカウントするなど公的の支援の在り方も問われるのではなかろうか。同時に、相談体制や専門性の部分でのより一層の充実が求められる。そのことによって、学生たちにとって、子育で支援室が実践的研修を充実する仕組みになっていくことを望みたい。

子ども自身の相談が増加の傾向にあることは、本来の子育で支援センターの方向として正しい方向性であるが、子育で支援センターとして保護者自身の相談も大切にしていくことが望まれる。さらに、効果的な子育で支援センターの在り方を検討し、充実したものにしていく余地はまだあるのではないか。

# 2. チャレンジ運動教室

# (1) ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」そしてテレビゲームやコンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思いっ切り動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、平成22年度より「チャレンジ運動教室」を開催した。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっており、その申込者はこの10年間で2171名である。

保護者、子どものそれぞれのねらいは、次のと おりである。

・保護者・・・子どもと一緒に「運動遊び」を 楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子 を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に 付けたりする。そして、この教室をきっかけに 家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を 積極的に設定して、子どもの心身の発達を促そ うとする態度を育てる。 ・子ども・・・「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思いっ切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

# (2) 令和元年度の教室の概要

- ① 参加申込者:190名
  - ・幼児(5.6歳)とその保護者 31組
  - ・小学校1.2年生とその保護者 60組
- ② 教室開催回数:13回
  - ・前期の部 5/25, 6/1, 6/8, 7/22, 7/13, 7/20 (6回)
  - ・後期の部 9/28, 10/5, 10/12, 10/22, 10/26, 11/16, 12/7 (7回)

### ③ 教室の内容

本教室では、特定の動きの習熟を意図する「動きの洗練化」ではなく、多様な動きの習得を意図する「動きの多様化」を目指している。本年度に取り組んだ運動遊びは、下記の通りである。

- a) 移動系の遊び
- ・信号ゲーム ・ラダー遊び ・オセロゲーム
- ・長縄跳び ・宝運び ・バルーン
- ・しっぽ取り ・あんたがたどこさ
- ・3秒間走 等
- b) 操作系の遊び
- ・風船遊び ・ゴミゴミボール遊び
- ・バトンスロー ・ボール投げ遊び
- ・新聞紙遊び ・バッテング
- ・スティック・ザ・ゲーム 等
- c) 姿勢制御運動系の運動
- ・進化ジャンケン・パプリカダンス
- ・人間オセロ ・座布団・敷き布団・掛け布団
- ・マット引き ・綱引き ・平均台遊び
- ・跳び箱遊び 等
- ④ 子ども教育学科学生の参加者:175名参加

宮内ゼミに所属する学生が、指導教員の指導を受けながら指導内容を計画して実践した。教室開始1時間前に、子どもへのかかわり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネージメントやつまずいている子どもへの指導を行わせた。教室終了時には、学生一人一人の反省や学びについて事後指導を行った。

当初は子どもと遊べなかった学生が、子どもとかかわる経験を繰り返して遊べるようになる。子どもへの説明・指示がままならなかった学生が、子どもたちや保護者を適切に動かした運動指導ができるようになる。この経験が、教師に必要な実践的な力量形成を図ることにつながっている。

### (3) 今後の課題

- ・子どもの運動にかかわる課題を明確にして、その課題解決のための教材開発に努める。
- ・本教室に参加する学生の学びを明らかにして、 今後の本教室における学生教育の在り方を検討す る。

# 3. あそびの教室「絵皿に絵をかいて遊ぼう」

地域の親子が参加できる活動として、2010年 の学部開設年からはじめた本活動は、10回目で ある。昨年に引き続き「あそびの教室」第10回 「絵皿に絵をかいて遊ぼう」を企画し、2019年10 月26日(土)に開催した。この「あそびの教室」 は、単に子どもを遊ばせるだけのイベントではな く、親子で活動に参加してもらうことで、①家に 帰ってからも親子であそぶヒントになるような遊 びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶこ とで、あそびによる成長と創造の楽しさや大切さ を体験してもらうことを目的とした。また準備か ら当日まで、教員だけでなく学生も参加すること で、学生のボランティア精神と創作教育につなが ることも目的としている。以下、活動の取り組み 内容(動物や昆虫、船や飛行機、樹木や小屋のダ ンボールによる遊具のあそびと、子どもの絵の話 の講座と絵皿作りと自由画制作) について報告す る。

# (1) スタッフと準備

- (a) スタッフ: 人間発達学部の教職員1名と子 ども教育学科2~4年生7名が参加した。この活 動への学生の参加は授業科目「子ども支援地域活 動」の一環でもある。
- (b) 準備したこと:本企画は6月から10月までの間の内8月中旬~9月の夏季休業を除きおよそ3カ月が準備期間である。図画工作室での工作は、

犬やキリンといった特徴があって制作し易い工作 を中心に、遊具制作の提案を続けてきたが、今年 は昨年同様段ボールと広告紙等を使ったⅢに子ど もが自由画を描くという絵Ⅲ見本や、絵Ⅲに直接 絵が描けるように事前に制作し準備した。今年度 は主に課外の時間に修理補強を中心に遊具の整備 を心がけた。動く玩具としてキャスターを取り付 け、遊びの範囲を広げ、引き続きコンパクトリヤ カーを遊具のベースに使った本格的な動くウルト ラマンの遊具等を本館4階のプレイルームを中心 に配置計画した。前日の準備は、教員と学生で、 本館4階プレイルームと廊下を中心に、動く船や 飛行機、魚、樹木、子どもの家、動物(キリン、 馬、犬、豚等)、昆虫(蟻、クワガタ、カブトム シ) ゴジラ等の作品を配置。以前から希望の多 かった「子どもの絵の話」を教員が保護者向けに 講座を開講を予定。その他、事前に広報(都城市 や三股町の広報課に協力戴く)、傷害保険の手 配、FAXでの参加者の募集を行った。

### (2) 当日の活動

「あそびの教室」前日の2019年10月25日(金) に、2~4年の有志学生で本館5階からプレイルー ムと4階フロアーに遊具の作品を搬入した。当日 2019年10月26日(土)は、事前打ち合わせ等は 8時30分から準備した。主活動は9時から11時(2 時間)実施した。昨年から引き続き保護者を対象 に、「子どもの絵の見方」の冊子をつかって講座 を開いた。その間、子ども達は学生と遊具で楽し く遊ぶ非日常の空間を体験した。11時30分で終 了し13時までに反省会と後片付けを終えた。参 加者は幼児(5~6歳児を中心に4歳以上の未就 学児)と小学生の親子4組、計8名と保護者5名 であった。工作の内容は①段ボールと広告紙によ る絵皿制作、基本素材をあらかじめ学生と教員で 作ったものを準備して絵画作品のベースに使用す る。②広告の紙を2倍に薄めた接着剤(ボンド) と段ボールを骨材にして作るシンプルな技法であ る。①②共に教員が説明を行い、学生ボランティ アは主にあそびのパートナーとして活動し、教員 が親子の工作を手伝った。時間短縮のために、絵 皿等のベース作品は、学生ボランティアの事前の 制作協力に支えられた。

### (3) アンケート結果と今後の課題

親へ協力をお願いしたアンケート結果では、「楽 しかった | 「ためになった | 「また 『あそびの教室』 に来たい」は回答者全員が「はい」という意見で あり、「家に帰ってからも、やってみようと思う| と「子どものことで、これまで気がつかなかった 発見があった | に関してはやや消極的反応もあっ た。しかし子どもが自由に使えるダンボール遊具 での遊びは、参加者には非日常の有意義な活動に なったと思われる。今後親が子どものことに注目 しやすくなるような配慮や工夫することを検討し たい。また自由記述項目では、楽しかった、機会 を増やして欲しい等の意見があった。また、今後 も続けて欲しい、更に創造意欲が増したようだ、 昨年同様、「幼時期にこのような遊びができると 良い。|「出前講座のようなことをしていただける と図工の楽しさが伝わるのではないか」「子ども に(ぬり絵)が良くないことが分かった」等の意 見もあった。一昨年、子どもの自由画について質 間があったのをきっかけに、昨年から保護者向け に「子どもの発達段階と子どもの絵について」講 座を開くことにしたが、子どもの絵の見方につい て多少理解が進んだと感じる。絵画と工作が心象 表現で繋がっていることや、イメージを育てる造 形の理念を理解していただく子育て支援の機会と して今後も続けたい。

今年のテーマも初回より一貫して親子(幼児・児童)で関わる自由画と工作である。工作は大人が積極的にならないと子どもの参加は難しい。ダンボールや紙を使うのは幼児・児童の遊びで大切な安全を、中心に考えているからである。素材の紙から様々なアイデアやイメージを創りだすあそびが紙工作の意味であり、親が制作をしている姿を幼児が見ながら僅かでもお手伝い参加とあそびに興じる姿をイメージして企画している。工作は制作しているその時間が"楽しい遊び"であり安易に結果(作品の出来不出来や、出来栄え)を求めるべきではない。この活動は遊びを主体とした幼児・児童の参加に重きを置くもので、工作は親には頑張っている制作の姿を見せて欲しいと願う

ものである。今後の活動の要望も、幾つか新たな活動の提案もあり更に検討していきたい。一昨年から活動内容の課題、進行の方法などの問題点を克服する為に、短時間ながら講座でお話をし、子どもの自由画表現やあそびとしての工作の本来あるべき姿を説明した。工作は完成を目的とするのではなく経験をするプロセスの大切さ、試行錯誤の重要性といった幼児造形教育の理論を参加された保護者の方に解説した。「子どもの時から手を創造的に使おう。失敗も成功も立派な作品である。」というのが更に継続目標である。

今回は「あそびの教室」の10回目であったが、活動の参考になることが数多くあり、更に次年度以降も改善しながらよりよい活動を作り上げていきたいと考えている。

# 4. 子育てひろば「みなみん」

子ども教育学科附属子育で支援センターの取り 組みの一環として子育でひろば「みなみん」を実施している。地域の子育で家庭を支援すること、また、学生が乳幼児とその保護者とのかかわりを 学ぶ機会を作ることを目的に、定期的に開催を続けている。活動も5年目になり、学生もみなみんの活動主旨を理解し、運営をするようになっている。現在は、4年生の6名が運営の中心として活動している。今回は、平成31年1月から令和元年12月までの活動について報告をする。

### (1) 実施の概要

①実施回数:計18回(1月~12月)

開設当初から、原則月2回、毎月開催することを目標としている。隔週の火曜日を実施日と設定し、午前10時から12時までを開設時間とした。 実施日の詳細は以下の通りである。

| 1月 | 15日、29日 |
|----|---------|
| 2月 | 12日、26日 |
| 3月 | 12 日    |
| 4月 | 16 日    |
| 5月 | 14日、28日 |
| 6月 | 11日、25日 |
| 7月 | 9日、23日  |

| 8月   | 27 日    |
|------|---------|
| 9月   | 開催なし    |
| 10 月 | 8日、29日  |
| 11月  | 12日、26日 |
| 12月  | 10 日    |

#### ②利用者数

1月から12月までの計18回の実施で、利用した保護者の人数は延べ190人、子どもの人数は延べ29人であった。

#### ③参加学生数

参加学生については、前期はボランティアとして自主的参加の学生が主であり、後期に関しては、ボランティアの学生に加え、子育て家庭支援論受講の3年生が輪番で参加をした。1月から12月までの計18回の実施で、学生の参加人数は延べ110人であった。ボランティア学生の中心は3・4年生であった。時間割の都合上、1・2年生がボランティアに参加をすることが難しく、今回もその点が課題となった。

#### ④運営スタッフ

子育で支援センターのパート保育士であるY さん、4年生の6名を中心として準備、運営を行っ た。学部教員は、担当時間を割り当て参加し、学 生へのアドバイスや保護者から相談があった場合 には対応ができる体制をとることができた。

複数の教員がみなみんに参加をすることで、それぞれの専門知識を生かして保護者からの相談に乗ることもできていた。

# (2) 取り組みの実際

毎回、実施日の1週間前に参加学生が集まり、準備会を行った。準備会には子育で支援センターのパート保育士であるYさんにも加わっていただき、学生へアドバイスをお願いした。準備会では、お楽しみ会の役割決めや手作りおもちゃの作成、既存のおもちゃの消毒、壁面構成等、実施日に向けての準備に取り組んだ。また、実施の案内・広報に関しては、大学のHPに開催案内を掲載することや、平成29年から開始したみんなのTwitterにも開催日の案内を掲載し、周知に努めた。Twitterでは、施設の写真や学生の準備会

の様子などを掲載し、初めての人でも安心して参加ができるようにしたことに加え、開催案内や次回の活動予定内容も積極的に掲載をするようにした。さらに、近隣の子育て支援センター等に開催案内のチラシを配布し、他の子育て支援センターを利用する方に本学の取り組みを知っていただくようにした。

お楽しみ会では、パネルシアターやペープサート、からくり絵本の読み聞かせ (夢を叶える塾にて制作)、ダンス、わらべうた等、学生の趣向を 凝らした内容で実施した。

今年は、夏には水遊びの機会を設け、12月にはクリスマス会を実施するなど、参加者により楽しんでもらえるように計画し、実践した。

活動の流れは以下の通りである。

| 9:00 ~  | 学生集合                |
|---------|---------------------|
|         | →環境構成 (受け入れ準備、掃除等)、 |
|         | お楽しみ会のリハーサル         |
| 10:00 ~ | 親子の受け入れ             |
|         | →受付、子どもの名札を作成       |
| 11:30 ~ | お楽しみ会               |
|         | →パネルシアター、ペープサート、    |
|         | からくり絵本、わらべうた 等      |
| 12:00 ~ | 片付け                 |
| 12:10 ~ | 一言反省会               |

### (3) 今後の課題

子育てひろば「みなみん」も5年目の取り組みとなり、地域の子育で家庭に活動を周知できてきていると実感している。実際、開催日には毎回のように参加をする親子もおり、本学の地域貢献の一翼を担っていると言えるのではないかと思われる。また、そのことで、運営の中心になっている学生は子どもの成長に継続的にかかわることができており、実習では得られない経験が可能になっており、実習では得られない経験が可能になっていると考える。昨年の課題であった1年間の活動に見通しをもって計画することは十分にできたとは言えないが、お楽しみ会の最後に、次回の活動について案内をしたり、Twitterで活動内容を予告したりなど、次回も参加したいと思ってもらえる工夫を積極的に実践できていた。このことも、毎回のように参加してくださる親子が増えてきた

一因ではないかと考える。しかし、昨年は月2回 定期的に開催することができていたが、今年は1 回しか開催できなかった月や開催なしの月があり、参加者の延べ人数の減少に繋がっている。みなみんの開催には学生ボランティアの協力が欠かせない。学生のボランティア参加意欲の向上のために何ができるかを教員が考えていくことが今後の課題である。

# 5. 心理サポート

心理的な支援が必要な支援学校在校生と卒業生を対象に、継続的な支援を目的としてサポート室を開設した。支援学校在籍児童生徒3名、支援学校卒業生3名が、継続的に平均して月に3回から6回の支援を受けている。サポート室の開室日としては、週の水曜日との3時30から4時30分までと6時00分から7時00分までの2部制である。事前に予約してのサポート室への来室となる。支援の内容としては、コミュニケーションに関する支援と姿勢や動作への支援が主となる。支援によってコミュニケーションがとりやすくなることや、思い通りの姿勢変換や保持、動作がスムーズに行えるようになることでの情緒面の安定等をねらいとしての支援である。

活動内容については、本研究誌にて、別途記載する。

# おわりに

人間発達学部附属子育て支援センターの5つの 活動について2019年度の取り組みを報告した。

それぞれの活動は、地域の子どもとその保護者を対象とし、各教員の専門性を活かした取り組みとなっている。学生と教員、そして地域が一体となって様々な活動を行うことで、大学と地域が融合した子育で支援が実現されていると言えるだろう。しかし、センターの取り組みが地域に周知され活動が充実する一方で、各活動に共通する課題も見えてきた。

第一に、子どもたちやその保護者が抱える課題 を明確にし、その課題解決のための場や体験内容 について検討・開発に努めることである。そのた めにはそれぞれの活動に寄せられる子どもや保護 者の声を共有し、子育て支援センターとしてどの ように課題解決に向かうのか協議することが求め られる。

第二に、センターの活動に参加する学生の学びを明らかにし、今後の学生教育のあり方を検討することである。学生はボランティア活動を通し、多くの子どもや保護者とかかわることで成長していく。活動と学生の学びとの関連を明らかにし、学生の実践力を高める場としてのセンターの在り方を検討することが求められる。

第三に、学生のボランティア参加への意欲向上を図ることである。センターの活動の多くは学生のボランティアによって支えられている。しかし、この数年、学生のボランティア参加への意欲低下から企画・運営において苦慮するという現状もある。学生の意欲の向上のために何ができるか、学生と教員とが協力して考えていく必要がある。

# 引用参考文献

春日由美・宮内孝・古賀隆一・金子幸 (2018) 2017年人間発達学部附属子育で支援センター 活動報告 南九州大学人間発達研究, 8, 119 - 124

野村宗嗣・宮内孝・古賀隆一・金子幸・鳴海正也 (2019) 2018年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 9, 107-113